

社会福祉法人 宰府福祉会

wakatake

2025.7



連載

これからの 福祉サービスとは？

〈目次〉

1 P ~ 3 P 特集：皆さんのが将来、
安心できる生活を送るために。

4 P 皆さんのが声

5 P ~ 6 P 活動報告

7 P 総合防災訓練参加報告、お礼

第一回 みんなが将来、安心できる生活をおくるために。



「高齢者二人世帯になったけれど、これからの生活どうしよう」「親亡き後の障がいのある子どもの生活は、一体どうすればいいのだろう」「近くに知り合いもいないし、相談するところや何か頼めるところはないかな」——こんなふうに、将来に不安を抱えている方は少なくないのではなうか。

人口減少が進む社会で、福祉に関する悩みはますます複雑に、多様になっています。こうした地域の声に応えるため、平成28年の社会福祉法改正によって、私たち社会福祉法人にも新たな役割が求められるようになりました。

そこで今回は、当法人「宰府福祉社会」が地域のニーズに応え、皆さんに安心して暮らしていただくために提供すべきサービスは何か、そしてその為の取り組みについてご紹介します。

<鶴留 真一>

私たちの「どうしよう」に福祉は？多様性の時代への支援

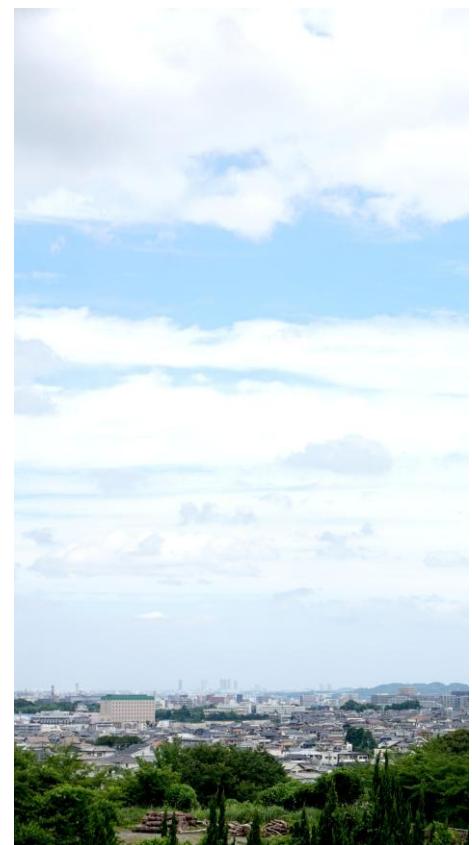
少子高齢、労働環境の変化、人手不足、物価高、自然災害の増加など、今、抱えている社会的課題は、私たちの暮らしにも大きく影響しています。福祉に関係していることとして、ダブルケア、8050問題、不登校、引きこもり、貧困、自殺者の増加、虐待など、社会的な問題が山積しています。

社会状況の大きな変化によって、福祉ニーズも変わってきました。最近はよく「多様性」「ダイバーシティ」という言葉を耳にします。改めて、その言葉の意味を調べてみると「性別や年齢、国籍、人種、文化、価値観といった異なる特性を持つ人々が互いを認め合い、共存していくこと」があります。確かに、人は誰でも個性を持った一人の人間ですから、顔や名前が異なるように考え方や価値観も異なって当たり前です。一方、日本では共同体(世間)で暮らし、コミュニティを意識しながらの生活が長らく続いていましたが、明治時代以降、敗戦を経験し、昭和の高度経済成長を経て、欧米の暮らし、価値観が定着し、今では「個人主義」の世の中になってきています。「向こう三軒両隣」の意識は希薄になっています。

人の価値観や考え方、昔とは大きく変わり、個々人の生き方は多岐にわたり、福祉に対するニーズも個別化している現状です。個別化したニーズに合わせるかのように、私たちのまわりには福祉サービスを提供する事業所もたくさん増え、利用を希望する方にとっては、「選べるサービス」がたくさんでききました。しかし、多くの事業所がしてきたとは言え、個別に細やかなニーズにお応えしていくことは難しいと思いますし、希望される方は「事業所は増えたけれど実際に利用することができない」と、サービスを選ぶことができない現状も少なからずあります。

こどもから成人まで、障がい福祉事業を展開する当法人も同様に、職員の減少、利用者、ご家族の高齢化は深刻です。その中で「個別化されたニーズにどう対応していくのか」、今、法人として取り組んでいるところです。

<大内田 美津子>



宰府園屋上からみた春日市近辺



地域生活支援センターの活動



地域住民の見学会



すみれ園卒園児保護者語ろう会

地域ニーズに応える社会福祉法人の新たな使命とは？

日本は、少子高齢化・人口減少社会に突入し、単身世帯や単身高齢者世帯、高齢夫婦のみの世帯が増加し、孤独死や孤立、老々介護等、様々な問題が取り沙汰されています。とても「自助」だけでは対応できない状況であり、「共助」の力を増し、「公助」と連携することで誰もが安心して暮らすことができる社会をつくるなければなりません。

社会福祉法人は、平成28年の法改正において、その公益性・非営利性を踏まえ、法人本来の役割を明確化するため、「地域貢献」を行うことが義務化されました。「地域貢献」の3要件は、①社会福祉に関する福祉サービス②日常生活、社会生活上の支援を必要とする者に対する福祉サービス③無料又は低額な料金であること、となっています。

制度化された本業とは別に、社会福祉法人がもつヒト、モノ、カネ、言い換えれば、職員がもつノウハウや専門性、建物等のハード面や再投下できる財産を活用して地域に貢献するということです。制度化された「公助」で対応できるものはそれでよいですが、既存の制度では対応できない「制度の狭間」にある地域ニーズに社会福祉法人は対応することが求められています。



研修「これからの
宰府福祉会について」

筑紫圏域の中で48年に及ぶ「障がい福祉」の実践の中で積み上げてきた経験を生かし、当法人としても利用者の高齢化や重度化をはじめ、地域の困りごと、地域が抱える課題を把握し、地域や行政と協働し、適切に対応していくことが求められていると思っています。

また少子化の影響から、福祉・介護人材の不足が懸念され、福祉人材の確保と育成が最重要の課題になっています。障がい福祉サービスは、公定価格である以上、給与の改善には限界があります。働く環境の整備、ICT等の活用、業務やサービスの標準化を図りながら、障がいのある方への福祉向上と地域貢献という、地域共生社会の実現を目指すやりがいを実感できる仕事のあり方を提示し、実践していくことが大切だと考えています。

<中村 勝利>

人に寄り添うセーフティーネット、最善の方法とは？

当法人「宰府福祉会」では、地域生活支援センター（以下センター）を中心に法人の使命を果たすべく、様々な取り組みを始めています。その中から3つの取り組みをご紹介します。



地域生活支援センター ドローン画像

①各施設のバックアップ

当法人は年齢も障害も様々な方が利用されています。ライフステージの変化に伴う地域移行先の検討や調整、安心した生活を送るために必要な一時的な支援を、センター内の相談機能や日中一時支援事業、短期入所事業を活用して行っています。

②法人内資源のコーディネート

法人内職員の人材育成だけでなく、ボランティアの受け入れ等を通じた福祉人材の養成も法人の使命として取り組んでいます。また、法人は各市より3か所、福祉避難所の指定を受けています。災害時には利用児者の安全確保と各市からの福祉避難所の開設依頼にスムーズに対応出来るよう、各施設の訓練に加え、センターが拠点となり福祉避難所開設までのBCP訓練を法人全体で定期的に行っていきます。

③セーフティーネット機能

私達「宰府福祉会」が一番大切にしたいのは利用児者の地域生活の質（QOL）と安全安心です。利用児者が施設での生活や地域での生活に困った時、それぞれの施設だけでは解決できない、利用児者やご家族の複雑で多様な悩みにはセンターも一緒に取り組んでいきます。“地域”にある様々な資源の中から「その方にとって最善の方法は何か？」を法人内外の情報を基にして一緒に考え、地域生活を支えること、そして児～者までの法人であることを活かした幅広い視点での事例研究やケース検討もスタートしました。今後も事例研究を行い、それぞれの施設の支援の質を高めて安心な生活を送ってもらうことをセンターでは目指しています。

<岡田 美幸>

変化の先にある”本当の幸せ”を考える

現在、多くのご利用者が家族の高齢化や病気と向き合う時期に来ています。「介護施設に入居になった」、「病気になり入院手術をすることになった」、「親が亡くなり兄弟がキーパーソンとなった」。理由はいろいろですが、これから的生活が大きく変わることは確実な状況です。親が高齢になっていくのは、誰も同じです。そのための準備をされている方はどれほどいらっしゃるでしょうか。現状は、その時になって「どうにかしてください」と相談されます。その場合、とにかく本人が困らないようにいろいろな手立てを考えていくのですが、それは、その日をとにかく生きるための手段でしかありません。その後も続く生活を根本的に見直さないといけません。この機会をターニングポイントと受け止めてこれからの生活に変化が起きることを認めていくことから、将来への幸せな生活への一歩を歩みだせるのだと思います。



将来を見据えた相談

「ずっと同じように仕事がしたい」、「ずっと自宅で過ごしたい」、「ずっと私は変わりたくない」。その思いに寄り添いながらも、自分の体や心と向き合い、変化を認め、これから的生活をもっと穏やかに、心豊かな生活を送るための変化であるということを実感してもらうためにどうしたらしいかを常に考え、目の都合だけでなく、先の幸せを考えながら、これからも相談支援を行っていきたいと思います。

<井上 雅代>

「困った行動」の先に隠された「困りごと」を見つける

以前は穏やかな生活を送っていた利用者が、イライラすると物に当たるようになりました。何か理由があるのだろうと考えて、事業所で探ってみましたが、なかなかその理由を掴めずにいました。そこで、センターの職員も事業所へ行き、情報を集めたり、支援に入ったりして一緒にケース検討を行いました。

すると、「物に当たってしまうこと」が問題だと、その利用者への対応だけを考えていましたが、検討の中で、その行為に至るまでの時間や活動に問題があるのではないかという議論になりました。それは、利用者が「何故、キヨロキヨロしているのか」や「何故、突然立ち上がって動き出すのか」など、一つひとつの行動に対しての意味を考えることで出てきた一つの答えです。その答えが出るまでは、職員から見た「困った行動」だったのですが、本当はその利用者が「困っている」から物に当たるしかない状況だったと気付くことができ、以前より一歩進んだ支援につながりました。

本人の「困ったこと」を見つけることは、難しい場合が多く、検討を何度も重ねることも少なくありません。しかし、それを繰り返すことで少しずつ核心に近づいていきます。本人の「困ったこと」に寄り添うことで、利用者にとって安心で心地良い、より良い生活が送れるようになると考えています。

一つ終わればまた次と、問題が起きることもありますが、丁寧に寄り添うことができるよう職員皆と一緒に学びを繰り返していきたいと思っています。

<鶴留 真一>



みんなでセンター活動



集中できる活動選び



作品制作中



個別活動

お世話になつて
いる方々の声
を載せる
コーナーです

想い
つながれ

今回は、私たちと一緒に活動を支えていただいている

ボランティアさんの声です。

45年ぶりの再会

緑豊かな自然に囲まれ、さわやかな風の吹く宰府園で、みなさまと出会い、月に2回、合唱クラブとして楽しく歌の活動をしています。

隣町の元自治会長さんの紹介で、施設長さんにお会いし、みんなで楽しい音楽の時間、歌う時間を持ちたいというお話をお聞きしました。私で出来るのであれば・・と宰府園に通い始めて約1年が過ぎました。

身体を動かす準備運動の後、季節の歌や動作を入れた歌、懐かしの歌謡曲などいろいろな歌にチャレンジしています。昨年は、宰府園祭りで、数曲発表することができました。緊張しながらも声を合わせて歌うことができ、終わった後のみなさんの笑顔が印象的でした。

最近では、合唱の時間だけでなく、一緒に準備を手伝ってくれたり、リクエストをくれたりと、みなさまとの会話も増えてきました。「先生、そのピアノ重たいやろ。おれ手伝おうか。」歩行器を押しながらも、一生懸命に私のことを気遣い、声をかけてくれるAさん。ピアノや掲示物の準備を進んでしてくれるBさん。「今度いつ来てくれる? 私ね、この時間楽しみなんよ。」と帰る前にいつも話しかけてくれるCさん、などなど。みなさんの優しさに心が洗われます。

私はこれまで、約40年間、中学校で音楽の教師を務めてまいりました。大学を卒業してすぐの赴任先は南福岡特別支援(養護)学校でした。新人教師の私は、毎日が手探りで悩みの連続でした。それでも、子どもたちと一緒に歌ったり、合奏をしたり、音楽をしながら子どもたちとの距離を縮めていくことができました。体の不自由な子どもたちと触れ合いながら、私の方がたくさんのこと学ばせてもらい、その後の教師としての礎になったように思います。そして私はこの時出会った初めての生徒Mさんと、この宰府園で再会することができたのです。45年ぶりの再会、会った時は、わからなかつたようで不思議そうな顔をして「覚えてない」とひとこと。しかし、次の週に、修学旅行先で一緒に馬に乗った写真を見てもらうと、「あっ小山先生!」と指さしてくれました。私の旧姓でした。驚くと同時にうれしくて涙が出そうでした。そんなMさんと、今までここで一緒に音楽をしています。

音楽でつながる輪、そして広がる輪 これからもみなさんといっしょにこの時間を楽しく過ごすことができればと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。



宰府園合唱ボランティア 江口 尚美様

ボランティア活動はライフワーク

この記事では、長年にわたり「障害者生活支援センター にじ」(以下にじ)の活動を、ボランティアとして支えてくださっている春口宗弘さんにインタビューさせていただきました。

春口さんがボランティア活動を始めたのは、約30年前、早めの定年退職を機に「障がいのある子どもの通学支援」を考えたことがきっかけだったそうです。他の障害者施設でのボランティア経験を経て、にじでの活動を始めたそうです。他の事業所を含めると、ボランティア歴は30年近くにも及ぶとのことで、その情熱と継続力にはただただ頭が下がるばかりです。

春口さんは、社会での仕事が「早くすること」を重視しているからこそ、ゆっくりと時間が流れ、肩肘を張らずに自然のままの自分でいられるボランティア活動に魅力を感じておられるそうです。そして、利用者との関わりの中で、言葉だけではない意思疎通の難しさや、時には感情の爆発に直面することもあるそうですが、それらも「喜怒哀楽」として受け止め、「相手が何を求めているのか」と考えることも楽しいと話されました。特に、利用者の笑顔が見られた時や、言葉ではないコミュニケーションができた時の喜びは、「今もずっと続いている」と笑顔で話されていました。

春口さんにとて、ボランティア活動はもはや生活の一部、「ライフワーク」となっており、にじに来ると「職員の皆さんに優しく接してくれて落ち着く」とお話しされました。そして、「こちらがリハビリさせてもらっているようだ」という春口さんの言葉には、器の大きさを感じ、インタビューをしている私まで癒され、心が洗われるような思いでした。そして、現在のにじにとっての春口さんは、そこに居て頂けるだけで、利用者はもちろん職員までも穏やかな気分になると施設長からも聞き、その存在の大きさを知ることができました。

現在86歳になられた春口さんは、「体力が落ちてきた」とおっしゃいながらも、「来られる限りは続けたい」と最後にお話し下さいました。

本当にありがとうございます。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

取材協力：にじボランティア 春口 宗弘様
取材・文：鶴留 真一



新年度がスタートして3ヶ月が経過。
変化の年度のスタートにあたり、事業所での活動の様子をお伝えしていきます。

「やまもも・すみれ園相談支援センター」は地域生活支援センター内に事務所を引っ越しました。業務内容としては変わりないので、それぞれの家庭状況の変化により、生活の場、仕事の場などの環境を変える必要性があるケースが増えてきました。いろいろな事業所や行政と連携して一つひとつのケースに対応しているところです。

また、「短期入所」の利用受付もセンターの相談窓口で受けています。軌道に乗るにはまだ時間がかかりそうですが、まずは、地域の社会資源と一緒に探していくながら、必要に応じて利用の検討を行っているところです。



センター会議



<井上 雅代>

福岡県障がい児等療育支援事業

6月28日（土）、筑紫圏域にある主に保育園、幼稚園の先生を対象とした「子どもの集団場面で困った行動とは」というタイトルでの研修会を行いました。すみれ園では以前より研修会を行っており、今回申し込まれた15名の中には、繰り返し参加をしてくださっている方もいらっしゃいました。

「子どもの困った行動」の裏になにがあるのか、どうして困った行動をしてしまうのか、という内容を子ども目線（子ども軸）で見た「泥んこ遊び活動」を取り上げ、話を進めました。発達の話や障がい特性、そして具体的なケースをお伝えしつつ「子どもの権利条約」や「合理的配慮」といった人権擁護につながる話もさせて頂きました。

研修会終了後に、子どもの具体的な悩みの質問も多くあり、日頃悩みつつ保育を頑張っておられる先生方の熱意ある表情を見て、私も元気付けられた研修会となりました。



研修会の様子



先生軸で見た世界



子ども軸で見た世界

<鶴留 真一>

研修会に参加された皆様に書いて頂いたアンケートを紹介！

- 保育所での集団活動の中では、保育士目線でやって欲しいと思うことが多くなりがちで反省しました。子どもの目線で立ってみることで“できない”のではなく”困っている”に寄り添い分かってあげられるようになりたいです。
- 実際に保育園である場面（泥んこ遊び）を取りあげたお話だったので、分かりやすくその時の自分の視点を振り返りながら考えることができ、とても学びの多い時間でした。保育士の人数も限られる中で寄り添う保育が出来るのかな…？と少し頭をよぎることもありましたが、最後に話されてあった”今の環境でできることを見つけていく”ことを精一杯頑張りたいです。
- 自分軸と子ども軸という考え方で保育を考えることがなかったので、自分軸になりすぎず子ども軸を大切にしていきたいと思いました。
- 昨年度も参加させていただき、そうなのかな…と考えさせられました。今回はもう一步先の内容も入り、具体例も多く、より勉強になった。



子どもの特性に配慮した環境設定

宰府園

4月に障がい者スポーツ大会に参加し、ボッチャで福岡県2位の成績を収めました。スポーツ大会には他の入所施設の利用者の方も参加されており、交流を深めることができました。

5月はイオン大野城「黄色いレシートキャンペーン」でホットプレートを購入し、梅ヶ枝餅ならぬ焼き餅を作りお茶会をしました。

6月は利用者の方が使わなくなった物でSDGsバザーを行い、買い物を楽しんでもらいました。



大会後のひと時



SDGsバザー

<吉福 美紀>

やまもも

みんなが楽しみにしていた玉ねぎとじゃがいもの収穫に5月と6月にそれぞれ行きました。両日とも晴天の中、みんなも手慣れた様子で次々に掘りだし、持参したケースがあつという間にいっぱいになりました。特に玉ねぎは一つひとつがとても大きく「びっくり！」

収穫した野菜はそれぞれお土産で持ち帰ったり、給食で食べたりしました。とてもおいしかったです。



たまねぎ掘り



たまねぎを持ち帰る準備

<岡田 美幸>

ゆり工房

4月25日、日常は仕事（生産活動）に精を出している利用者さんもこの日ばかりはリフレッシュ！プロレスラーの阿蘇山選手（九州プロレス）が施設を訪問してくださいました。筋骨隆々の大きな体にみんなびっくり！筋肉を触らせてもらったり、相撲をとったり、お姫様抱っこをしてもらったりと楽しく交流することができました。帰りには「ゆり工房」のパンを買ってくださいました！本当にありがとうございました。



阿蘇山選手とハイチーズ



<中村 勝利>

さいふ

さいふは4月に「アクティビティセンターさいふ」として新たな歩を踏み出しました。生活介護に一本化したことによって、日々の活動内容も大きく変わりました。生産班（元B型利用者）では、活動の一環として清掃や木工作業に取り組むと同時に、創作班と一緒に楽しむ場面も増加。リラックスや集中の「静の時間」と運動やレクリエーションの「動の時間」のメリハリをつけ、日課の充実を図っています。



ホールにてストレッチ中



ビーズと壁面制作

<大内田 美津子>

すみれ園

5月27日～29日、保護者対象の参観懇談会を実施しました。

懇談会では「コミュニケーションの視点から考える園生活について」の話をさせていただきました。また、保護者の方同士の自己紹介を行い「子どもと一緒に働くおすすめの場所」や「子どもの好きな遊び」等のお話ををしていただき、盛り上りました。

最後に給食試食会では、栄養士より献立のポイントや調理の工夫点等の説明をさせていただきました。今後も子どもたちの姿や成長のポイントを保護者の方々と共有していきたいと思います。



レツツ クッキング!!



活動前の手遊び

<矢野 佳子>

にじ

にじでは、食事・入浴・排泄などの日常生活の支援・介助を行っています。散歩や様々な機器を利用しての機能維持活動や園芸活動を行ったり、エコキャップ活動やごみ拾いをしながらの近隣散策など、一つひとつは小さいけれど地域や社会に貢献できるような活動にも取り組んでいます。ボランティアさんの協力も得ながら利用者の皆さんのが楽しく活動し、安心して過ごせるよう努めています。



みんなで近隣散策



じゃがいも掘り

<木原 直輝>

福岡県総合防災訓練に参加しました。



5月25日に、大野城市、春日市、那珂川市と福岡県との共催による「令和7年度福岡県総合防災訓練」が実施され、福岡DWAT（福岡県災害派遣福祉チーム）の一員として訓練に参加してきました。

総勢約1,200名、約60団体の参加による風水害と地震を想定した大規模な訓練でした。その中でDWATは、避難所に来られた方の体調面や困りごとを保健師と一緒にお聞きしながら、福祉ニーズの必要な方の洗い出しや、福祉避難所への移動の必要性などを確認していきます。体育館での訓練でしたので、グラウンドでの訓練の様子は見ることができませんでしたが、災害救助犬が家屋から生存者を見つけたり、いろいろな災害に対応する車両が一堂に集まったりしていました。

DWATの訓練では、実際に能登半島地震



DWATビブスを着て相談対応



簡易テント設置訓練

の時に派遣された方と一緒に訓練したこと、想定以外の現場での課題やニーズなども聞きながら訓練ができました。避難してくる方はいろいろな想いを持ちながらやむなく避難されてきますので、マニュアル通りの聞き取りではいけないことは明確です。

日頃の相談対応などを通して、避難者との良好な関係を築いていなければ、避難者も支援者も心身ともに疲労してしまう感じました。同時に、福祉的な視点の重要性を改めて感じました。保健師さんは健康面等を主に確認しますが、福祉チームは、災害時での生活面での困りごとや困っていると言えない状況を把握したりする役割があると感じました。大変貴重な経験でした。

宰府福祉会 災害派遣担当 井上 雅代



緊急車両出動訓練

<ご寄付を頂きました>

この度、長頬子様より「やまもも利用者の快適な生活のために」とご寄付を賜り、老朽化し始めていたウッドデッキの修理工事を行わせて頂きました。

温かいご支援に、心より厚く御礼申し上げます。

障害福祉サービス事業所やまもも 施設長 岡田 美幸



修理させて頂いたウッドデッキ

みんなの声



「wakatake」に関する質問やご意見、ご要望など、皆様の声を聞かせてください！
下のQRコードよりgoogleフォームに入力をお願いします。



『編集後記』

7月号より「wakatake」の編集に参加させて頂きました。皆様に「読みたい！」と思っていただける内容や、文章を考えることの難しさを痛感したところです。

そんな7月号は「変化」に直面する宰府福祉会の今についてでした。ICTの活用やケース検討を通して、職員全員更なるスキルアップを目指したいと考えています。皆様のより良い生活の為、これからも邁進してまいります。

広報委員 待鳥 優輔

